

お茶うけ 第64話

わが妻恋し

1948年(昭和23年)頃と思いますが、中学生の私は名古屋の金城女学校の講堂で、賀川豊彦の熱烈な講演を聞いたことがあります。この講演会は、戦後の1946～1949年にかけて賀川豊彦が全国をかけめぐり、戦争で荒廃した日本の再建を国民に訴えたものの一つで、小柄な体から全精力を絞らだすような大きな声で、敗戦国日本の復興のために心と力を併せて立ち上がろうと訴えていました。私は強い感銘を受けたことを覚えています。



賀川豊彦(1888～1960)は、日本語大辞典(講談社刊)によると、「牧師・キリスト教社会運動家。神戸生まれ、神戸神学校、米プリンストン大卒。神戸貧民街の伝道をはじめ、労働運動・普通選挙運動・農民運動・生活協同組合運動などに尽力。著書『死線を越えて』など」と説明されています。常に苦しみ悩む人たちの中に飛び込んでいって活動した人でした。

最近、私は賀川豊彦の妻ハルについての評伝『わが妻恋し』を読んで、今度は賀川夫妻が、お互いに感謝の気持を持って、共通の目的のために協力しあい助けあって生きる姿に感動しました。

賀川豊彦は、肺を患うなどして何度も死線をさまよい、一度は人生に絶望しますが、「肺病で死ぬのなら、それまでの間ありったけの勇気を持って、神と人に奉仕しよう」と決心して、21歳の1909年(明治41年)に神戸の貧民街の長屋の一部屋を借りて、貧民同様の生活をしながら、周囲の人々の救済とキリスト教の伝道を始めました。

そのうち、ハルがこの神戸の貧民街での活動に参加するようになり、1913年に二人は結婚しました。結婚したその日から、ハルは神戸の貧民街にためらうことなく住み込み、貧しい人びとに尽くし、悩める人びとの相談に乗り、三人の子供を育てました。

1923年(大正12年)9月関東大震災が発生すると、賀川豊彦は、救援物資や義援金の募集と被災地の復興支援に東奔西走し、さらに被災地のスラム化を防ぐため避難民住宅政策の立案に積極的に参加しました。

1941年、豊彦は戦時の国策にそぐわない言動があったとして、憲兵隊に拘引されました。

この間、ハルは賀川豊彦の妻として、事業の最良の理解者として、夫がキリスト教の伝道と社会活動を全力で押し進めるのを助け、夫が次々に興す社会事業の運営と資金繰りをしっかり支えました。『死線を越えて』が空前のベストセラーになり、高額印税が入りましたが、すべて社会事業の運営費として右から左へ流れて、生活費とはならず家計はいつも火の車でした。また、ハルは、自らの女工の経験を生かして女性の立場で、女性の覚醒のための講演を行い、多くの著作を残しています。

評伝『わが妻恋し』に、賀川豊彦自身が「ハルは、よくやってくれた。ハルがいなかったら、僕の仕事はできなかつたかも知れない」と言ったとありますが、ハル抜きではあの多くの社会事業は進まなかつたでしょう。

わが妻恋しいと恋し
三十九年の泥道を
ともにふみきし妻恋し

工場街の裏道に
貧民窟の街頭に
共に祈りし妻恋し

緑の髪は白くなり
肌には深き皺よせて
若きかんばせ失せゆけど
霊のわが妻いと恋し

めいいの夫の手を引きて
みめぐみ数える妻恋し

また、私は評伝を読んで、結婚後のハルが人として素晴らしく成長していく様子に深く打たれました。ハルの成長も賀川豊彦なしには考えられません。

なお、書名の『わが妻恋し』は、1950年に賀川豊彦(62歳)が最愛の妻ハルにクリスマスの贈り物として、世界伝道中のアメリカから送った、『妻恋歌』の詩からとっています。

『妻恋歌』は、8つのフレーズで構成されています。右枠内に、その1と2と、7と8のフレーズを紹介します。3から6までの各フレーズには、それまでに二人が遭遇して乗り越えてきた上記のエピソードが簡明に読み込まれ、豊彦のハルへの感謝の気持ちが表されています。

以上

参考資料:

『わが妻恋し - 賀川豊彦の妻ハルの生涯』加藤 重著 晩聲社刊